

おわりに

最後に、本書のタイトルについて一言述べておきたい。本書のタイトルは『越境を生きる雲南系ムスリム』である。しかし、本書において雲南系ムスリムについて十分に記述されているのは、第4章と第6章、それに第7章の1節のみであり、それ以外の部分では、基本的に雲南系漢人もしくは北タイの雲南人全般の移住や定住に焦点が当てられて記述されている。本書が雲南系ムスリムと雲南系漢人を比較しながら分析を進めていることを考えると、こうした本書の構成には一定の理解を示し得る。しかし、タイトルは書物の内容を一言で表しているはずだ。もう少し工夫してもよかつたのではないか。重箱の隅をつつくような指摘で恐縮だが、一言付しておきたい。

(木村 自・大阪大学大学院人間科学研究科)

平井京之介、『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT出版、2011、257p.

「工場」「東南アジア女性」「近代化」——タイトルに示されたキーワードを目にし、本書を現代の東南アジア版女工哀史であろうと想定した読者はいないだろうか。否、本書はグローバル資本主義の支配関係に取り込まれた女性労働者を扱った「工場のエスノグラフィ」(p.7)ではあるが、その内容は女工哀史ではない。本書は、タイ北部工業団地にある工場で働く若い女性たちに焦点をあわせ、労働によってもたらされた近代性がタイ農村社会のなかでどのように受容されたのかを論じた民族誌である。

本書のアプローチの特徴は、近代的な工場労働に否応なく巻き込まれていく女性の姿を、工場のみならず、農村における家庭生活との連続した時間のなかで捉えたことである。著者は、チェンマイ近郊の工業団地にある日系企業の工場で働きながら、同工場員である女性の家に同居し、工場と農村の双方で参与観察やインタビュー調査を行った。そして、そのデータに基づいて、女性たちが伝統的価値観へ恭順を示しながら近代的な工場労働

に適応し、なおかつ家庭生活を創造的に再編成していく様を描き出している。そのことによって、既存の東南アジアにおける女性工場労働者の研究が、「搾取」を画一的な概念として無批判に前提としており、生活者としての女性たちが何を基準に搾取と認め、抵抗する/しないのかという地域の視点を見過ぎてきたことを浮き彫りにした。以下、章立てに沿って本書を要約した後、本書の議論が東南アジアにおける女性労働論に対して提起する問題を示し、評者のコメントとしたい。

「工場のエスノグラフィ」は、農村における伝統的な仕事観や行動パターンの記述から始まる(第1章)。北タイ農村において「仕事」(*ngan*)とは、農業や賃金労働、家の中の仕事(料理や掃除、洗濯、裁縫、育児や介護、健康管理、家族関係の維持を含む)、および儀礼などの活動であり、それらは「経済活動というよりは社会活動なのであって、他の社会関係から独立したものとして考えられていない」(p.27-28)。稲刈り時の雇用取引の事例では、雇用主はこれまでに付き合いのある近親者や隣人、友人らを、長期的でより親密な相互扶助的関係を見据えたうえで、労働者として「請う」。雇用者は、報酬が支払われるにもかかわらず、助けてくれる者として思いやりの気持ちをもって雇われ、食事などのもてなしを受ける。両者は、作業テンポを駆け引きしながら作業全体の秩序を維持する、あるいはゴシップで互いの行動を統制しながら作業することで、より親密な関係を築いていく。

続いて舞台は工場へと移り、北タイ農村女性たちが、上司や同僚との相互行為においても伝統的な農村社会の仕事観を用いながら工場労働に適応していく姿が論じられる(第2章、第3章)。舞台となる工場は、プラスチック製文具の下請け製造工場で、労働者の8割が組立課に所属し、組織の末端に属する組立作業専門の労働者(オペレーター)は全員が女性である。工場内では、労働者と日本人社長、およびマネージャーとの間で直接会話はなされない。業務命令は、タイ人マネージャーや課責任者を介して伝わり、問題発生時も労働者間でのみやり取りが行われる。労働者の採用も課責任者に一任され、現従業員と親族関係に

ある者の定着率が高いことから、採用に関して親族ネットワークの有無が重要視される。また、タイ人同士であっても、職位の差から優越感を持つ事務員に対して、労働者は敵意を抱き、伝統的なジェンダー価値観に反する性的なゴシップを広めることで抵抗している。それによって、固定的な階層性を一時的に転覆させ、自尊心を取り戻すためである。

組立課の労働者の職位は、上からマネージャー、チーフ、スタッフ、リーダー、オペレーターとなっている。リーダーと15~20人程度のオペレーターが一つの班を構成し、通常は二班で一つの組立てラインを担当する。オペレーターは、日本人マネージャーによって細分化された組立過程とノルマを与えられ、各班リーダーの監視下で単純な流れ作業を行う。ただし、与えられたノルマとは別に、同僚間の標準的な実績数が暗黙のうちに設定されており、各人がそのペースに同調することが求められる。リーダーは、それを黙認したうえで、作業実績を調整して上に報告する。しかし、オペレーター間に相互扶助は生まれない。仕事にのめり込まない、あるいは互いの作業に干渉し、相手の能力不足を指摘してしまうことを避けるという戦術によって、代替可能な単純労働者である自身や同僚の自尊心を維持しているという。

さて、本書が北タイ農村における女性労働者の「厚い記述」になっているのは、工場での労働過程以外の場面をも分析対象としているためである(第4章)。若い女性労働者たちは、隣人や親族ではなく、工場で知り合った気の合う同僚間でグループを形成し、休憩時間や終業後、休日などの余暇をともに過ごす。著者は、彼女らが休憩時間に繰り広げるおしゃべりのなかで人気のある三つの話題「ロマンチックな語り」「霊媒カルト」「カタログ販売」を取り上げ、これらの話題が「タン・サマイ (*than samai*)」と表現される「モダンな」ライフスタイルを想起させる行為や願望とつながっていると指摘する。タン・サマイとは、「『最新の』、あるいは『モダンな』という意味」であり、「服装や振る舞い、活動、雰囲気、そして人そのものについてこのことが用いられる。たとえば、最新の化粧品、セクシーな服装、人気のレ

ストランでの食事、デパートでのショッピング、人気のバーでの飲酒などがタン・サマイといわれる」(p.170)。著者は、こうしたタン・サマイという語がもつローカルな意味に注目し、タン・サマイな振る舞いとして女性労働者たちが想定する行為が、農村社会における伝統的な規範からの逸脱を正当化する機能を持つと同時に、文化的伝統の自明性を意識的、反省的に捉え直すきっかけにもなっているという。

そして本書の舞台は、再び農村へと戻る(第5章)。著者によれば、農村出身女性たちは、近隣の工場で働くことによって、安定した収入や移動の自由を獲得した。未婚者の場合は、休日にも家庭外で同僚と過ごし、恋愛および結婚相手を自分で選ぶことに積極的になったという。その結果、工場労働者が性道徳的に不道徳であるというイメージが流布し、工場で働く妻の行動を管理する夫も現れ始めた。しかし著者は、女性たちが働き始めて家庭での時間が減少したからといって、家庭内で女性に期待される役割までが減少したわけではないと論じる。むしろ彼女たちは、仕事と家庭での役割を両立させるべく時間を組織化し、夫や両親と交渉し、経済的合理性を計算するようになり、収入の大半を家庭に入れ、「家を化粧する (*taeng hyan*)」ことに精を出すようになった。まずは自分の家を建て、タン・サマイなライフスタイルを象徴する家電製品や家具を揃え、盛大な新築祝い儀礼をする。そうした実践が、主婦としての誇りを示す指標として、親族や隣人に評価されるからである。自らを化粧することに精を出すのは、家庭での責任を果たした後になる。

終章では、女性たちが工場労働を通して経験するタン・サマイという概念に基づく日常的な実践が、もうひとつの近代性のプロセスとして改めて論じられる。女性たちは、近代的な工場のシステムが一方向的に要求する行動様式を身に付けるのではなく、相互扶助や名誉の感覚を行動原理としながら農村社会の慣習的な実践を用いて労働に適応し、家庭生活をも変容させていた。そして、自らが代替可能な労働力であることを認識し、工場では戦術として自尊心を維持することに尽力しながらも、家庭生活では労働によって「自由になった」

「地位が向上した」(p. 225-226)と考えていた。ただし著者は、このような選択的な自由の享受は、農村女性が商業主義文化やグローバルな資本主義システムに対して周縁的な地位に組み込まれるプロセスでもあったと結論付けている。

経済的な条件が異なるので他地域との無条件な比較はできないが、本書からは、既存研究が労働にともなう東南アジア女性の多面的な実践を、「搾取」される対象として一元化してきたのではないか、という問題が改めて見えてくる。既存研究は、特定の活動や行為が「生産労働か家事労働か」というおそらく当事者レベルには存在しない問いを立てることで、どこの地域でも家内領域が市場化された労働空間から完全に切り離されているかのように扱ってきた。そして、両方を対立した概念として提示することで、論理上、女性労働は必ず二重性を帯び、労働市場において周縁化されるという構造的問題に自ら陥ってきた〔中谷 2003: 156〕。

北タイ農村の状況は、生活基盤を奪われ、低賃金で過酷な労働を強いられる地域と比べると特殊な環境かもしれない。農村地帯に位置する工業団地が常に労働力不足の状態で、「社会経済的条件によって命令に従う必然性が乏しい」(p. 217)という地域的特性から、女性たちは生存基盤を確保したうえで求職や転職には困らない。その意味では、先進国企業による東南アジア女性への無情な搾取を明らかにしてきた従来のフェミニスト的研究と本書を安易に比較することは躊躇される。しかし、環境の違いを十分踏まえたうえで比較するならば、本書は女性労働者の生活世界が工場でのみ完結しているのではなく、余暇や家庭生活と連続した時間のなかにあるという単純な事実と真摯に向き合い、仕事・労働をめぐる多面的な問題を地域特有の概念によって浮き彫りにしたと言える。

最後に、評者の問題関心から本書の課題をあえて挙げれば、本書の主題である労働を通じた女性の近代化経験が、北タイ農村社会全体におけるジェンダーの問題とどのような関係にあるのか、という疑問が残る。もちろん本書の主旨がそこにはないのは重々承知だが、女性工場労働者の近代化経験が及ぼす文化変容、特に家庭生活への影響を

明らかにするのであれば、現代北タイ女性の労働のあり方と農村社会における様々なジェンダー規範(たとえば祖霊信仰や儀礼に見られる母系のイデオロギー、財産分与や相続、親の扶養における女性の優先)がいかに関わっているのかという議論を本書で積極的に論じる必要があったのではないだろうか。著者も第4章と第5章でタン・サマイな行為と関わる範囲で個別に若干の考察をしているが、労働に関するオルタナティブな視座とは対照的に、ジェンダーに関しては伝統的な価値観とタン・サマイな価値観のどちらかに振り分けられたままである。グローバルな資本主義システムに接合していく過程で、北タイ農村社会での労働は、どのように女性(あるいは男性)の役割としてジェンダー化され、権力性を帯びて階層化していくのか。また、そもそも労働の場と家庭生活の場はいかに区別されているのか、特に著者の議論から垣間見える労働をも含み込んだ家内領域は、その外部といかに区別されているのか、という点こそが仕事・労働を通じた東南アジア女性の近代化経験から導き出されるオルタナティブな価値観であるとも考えることもできるのではないだろうか。

(木曾恵子・京都大学東南アジア研究所)

参考文献

中谷文美. 2003. 『「女の仕事」のエスノグラフィ——バリ島の布・儀礼・ジェンダー』京都：世界思想社。

新谷忠彦；クリスチャン・ダニエルス；園江 満(編)『(アジア文化叢書) タイ文化圏の中のラオス——物質文化・言語・民族』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所歴史・民俗叢書Ⅶ。東京：慶友社，2009，401p.

国民国家を単位とした歴史叙述への批判が高まって久しい。かつて古田元夫は、歴史研究が対象とする「地域」とは固定的なものではなく、歴史家が課題意識に応じて設定する可変的なものであるとする「方法としての地域」という見方を提